

低学年時の参加体験が

大学進学の方角付けに

公益財団法人育てる会 会長 青木 孝安

育てる会本部の事務所にはいろいろな人が訪ねてくる。

そんな中、今までになかった、意表^{いひょう}をついたとも言える訪問客が現れた。事前の電話によると、小学生の頃、育てる会の活動に参加した者であり、お会いしてお願いしたいことがある、と言うのである。

数万にも及ぶ参加者の中でのこと、私の記憶の及ぶべくもない。戸惑いつつ、会うだけだとも思い、面会を承諾した。

それは、小柄で、可愛い女の子であった。高校3年生とのこと。

彼女の申し出は、概要次のようなことであった。

ある大学への進学を考えている。その大学は、今度、「都市農村の交流」、「過疎地の活性化」という課題の科を新設する。この科への入学を希望する者は、事前に、そのテーマについて論文を書き、それに関係者の推薦文を添えて提出するようにとのこと。私にその推薦文を書いてほしいという申し出であった。

一時間ほどの及ぶ懇談の中で、特に彼女が訴えたのは、高校3年になって、今迄、なんとなく、一般社会の「暗黙のルール」に従って生きてきたが、果たしてそれでいいのかと疑問を感じるようになった。自分の納得のできる人生の生き方を真剣に考えるようになった。その結果、この大学の新設する科へ入学を希望する決心をした。後ほど、入学希望の理由書を書いてくるので、できたら、それを読んで、推薦の言葉を書いてほしいというのであった。

しかし、突然の訪問と依頼に、団体の責任者として、安易に推薦文など書くことはできないと思い、即答はしなかったが、彼女の言動と挙動の中に、どこかしら信頼のおけるものを感じたので、ともあれ、大学志望動機の論文を見せてほしいと言って、その時は別れた。

一か月ほどして、彼女から論文が届いた。概要を記す。

自分の方向について悩んでいた時、恵まれない人々のために食事を提供する活動にボランティアで参加した。

食事にすらありつけない子供や老人のいる実態を目のあたりに見て、社会の厳しい現実^{じつじ}にショックを受けた。それぞれの子供や老人には複雑な事情があることを知った。子供の中には、高学歴の両親の元、親の決めた路線に沿って素直に生きてきたものの、本人自身の生きる目的意志はなく、まるで「透明人間」のような感じの子供もいた。

そんな体験の中、何不自由なく恵まれた環境に育ってきた自分も、あるいは同じよう

な姿になるのかもしれないという不安感に襲われた。このようにはなりたくない。自身自身の生きる目的をしっかりと持った人間になりたい。親の期待に反しても、自分の生き方は自分で決めたいと思った。

そんなとき、子供時代、育てる会の活動に参加した時の体験が思い出された。遠い記憶ではあるが、親元を離れ、たった一人、誰も知らない集団の中におかれ、寂しい気持ちの中で、ここにいる以上、自分のことは自分で考え、行動しなければならないことを知った。あの時の体験が、高校生の今に蘇り、自分の生き方は自分で決めようと決心した。そしてまた、山村生活での美しい自然、農家宿泊での珍しい食文化体験などが鮮明に記憶に残っているという。そんな素晴らしい農村が過疎化に悩んでいる。そんな中で、都市と農村の交流、都市と農村の融合を考えたいと思うようになった。それがその大学進学の原因であると言うのだ。

私は、彼女の文章の奥で語られている彼女の心の動きに引き込まれて、「なるほど」とつぶやいた。

そこで、事務所には過去の参加者記録が保存されているはずと思い、パソコンで参加者データを検索してみた。すると、以下のような記録が出てきた。

- 第1回 山村生活体験活動(5泊6日) …… 小学2年生
- 第2回 山村生活体験活動(5泊6日) …… 小学3年生
- 第3回 高原と溪流活動(5泊6日) …… 小学4年生

小学3年生時の作文には、「親元を離れて、誰も知る人のいない中で生活することにより、自分のことは自分で考え、自分で決めなくてはならないことを学んだ」と書かれている。

彼女は、自分の体験に基づいた課題を持ち、その研究を目指して、それに合う大学への進学を目指していることを知った。

私はこのような彼女の考えと経歴を知り、推薦の文章を書く決心をした。

彼女は自己実現の第一歩を踏み出そうとしていると思う。

私は、十数年も前の低学年時の体験が、高校生になった時の方向付けにまで役立つことを知り、自分の仕事の意義深さを改めて知った。この事実を、山村にとどまり日夜、子供と寝食を共にしているわが団体の若い指導者たちにも知ってもらい、仕事の励ましの一助になればと願うのである。